広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第44号　2016.3〉

音楽科における指導力の向上をめざした効果的な教育実習のあり方に関する研究

―生徒指導と教科専門の観点から―　（２）

増井知世子　原　寛暁　松前　良昌　光田　龍太郎　泉谷　正則
長澤　希　　三村　真弓　伊藤　真　枝川　一也

１．研究の背景と目的

中央審議会は,「今後の教員養成・免許制度のあり方について（答申）」（平成18年7月11日）において，教職課程の質的水準の向上を図るために，教育実習の改善・充実の必要性を示唆し，「大学の教員と実習校の教員が連携して指導に当たる機会を積極的に取り入れることが必要である。また，実習校においては，基本的に複数の教員が協力して指導に当たることが必要である。」と述べている[1)]。

これを受け，４附属学校音楽科教員と大学教員の連携により，教育実習生の指導力の向上をめざすうえで，効果的な教育実習はどのようにあるべきなのかを明らかにすることを目的として，昨年度から研究をスタートした。

昨年度の研究を通して,「振り返り」や生徒の評価コメント等による実習生の成長が明らかとなった。また，共同研究によって，４附属学校音楽科教員が，日頃の実践や実習の様子について情報交換することができた。一方で，教員間のさらなる意識統一の必要性や，実習生の自己評価だけではなく，教員による客観的な評価の必要性も浮上した。加えて，各附属学校独自の教育実習の特徴から，実習生が抱える課題が実習先で異なることもわかった。そこで今年度は，実習生の教師力のさらなる向上をめざして，新たなる評価方法を加えるとともに，各附属学校における教育実習の特徴やそれぞれの課題等を明らかにし，大学授業の改善や，実習の改善につなげることを研究目的とする。

（三村真弓）

２．本年度の研究の概要

２－１　研究の流れ

８月下旬に，広島大学において，４附属教員と大学教員が集まり，打ち合わせの会議を行った。本稿のサブタイトルに掲げた２つの観点，すなわち，①生徒の学習意欲を高めることができたか（生徒指導・生徒理解の観点）と，②音楽の授業の質（クォリティー）は高いものであったか（教科専門の観点）について再確認したうえで，本年度の研究の流れを検討した。

実習生が自己評価を行うための「音楽科に固有の教師力」と「教師力全般」に関する，２種類のアンケート項目の詳細については，昨年度の本紀要に記したため省略するが，研究の流れの概略は，次の通りである。

上記のアンケートを実習前，９月実習の初めと終わり，10月実習の終わりに実施し，附属指導教員間で情報を共有した。生徒による授業評価カードの活用も１年次から継続して行った。

実習後，大学において，自分の授業の VTR を視聴して分析する取り組みを行うことも昨年度から継続して行った。

12月下旬に研究総括の会議を行った。

Chiseko Masui, Tomoaki Hara, Yoshimasa Matsumae, Ryutaro Mitsuda, Masanori Izumitani, Nozomi Nagasawa, Mayumi Mimura, Shin Ito,and Kazuya Edagawa:Pre-Service Teachers' Teaching Skills in Student Guidance and Musical Instruction in Teaching Practice

２－２　本年度の研究の新しい視点

実習生が獲得する教師力をできるだけ多面的に評価するために，本年度の研究に新しく加えた点は，次の２点である。

１）実習生は，授業後の批評会で指摘された内容と生徒による評価を総合して，上記①と②の観点から振り返りを行う。

２）指導教員は，教育実習後，実習生の教師力について上記２点の観点で評価を行う。

（増井知世子）

３．実習生の自己評価および指導教員による実習生の観点別評価の分析と考察

３－１　実習全般の教師力について

実習全般の教師力に関する自己評価について，全14項目それぞれの得点の平均値を算出し，実習前・１校目実習後・２校目実習後を比較した（図１）。実習前後の得点の差はほとんどなく，ほぼ同じ得点で推移している。したがって，実習前後において教師力の劇的向上は認められない。各項目の得点を見ると，得点の高かった項目としてまず，③積極的に生徒と関わる意欲［3.99→4.05→4.11］や⑫授業の反省・批評を活かす意欲［3.93→3.92→3.92］が挙げられる。また，⑬実習の達成目標があるか［3.80→3.79→3.78］や⑭直実に勤務する自信があるか［3.82→3.81→3.91］の２項目も得点が高かった。つまり，実習生は実習を通してやり遂げたいことや理想の教師像をもっており，実習に対する高いモチベーションももちあわせていることが分かる。しかし，教科の知識や音楽の実技技能を含めて，授業を形成する能力や教室の中で求められる現実的な振る舞いに関する能力は実習の前後で変化なく，自己評価は一貫して低い。これらの教師力は，２週間の実習を２校にわたって行う程度の短期間では劇的に向上するものではなく，むしろ教師となって実際に教育経験を蓄積するなかで徐々に培われていくものであると解釈できよう。

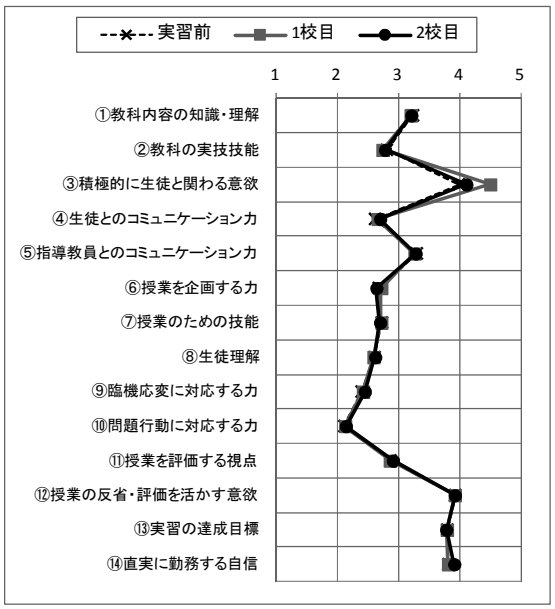

図１　実習全般の自己評価結果

３－２　音楽科の教師力について

音楽科の教師力に関する自己評価について，歌唱・器楽・鑑賞の３領域に分けて得点の平均値を算出し，実習前・１校目実習後・２校目実習後を比較した（図2-1，図2-2，図2-3）。歌唱と器楽において，「学習者の学習成果」に関する①～⑥の６項目は，項目によって得点にばらつきがあり，実習経験を重ねることによって必ずしも得点が高くなるとは言えない。一方，「指導者の指導技術」に関する⑦～⑨の３項目は２校目実習後の得点が最も高くなる傾向が見られ，実習経験に応じて指導法や指導技術のコツが体得できつつあると言える。鑑賞ではどの項目も得点の大きな変化は見られない。

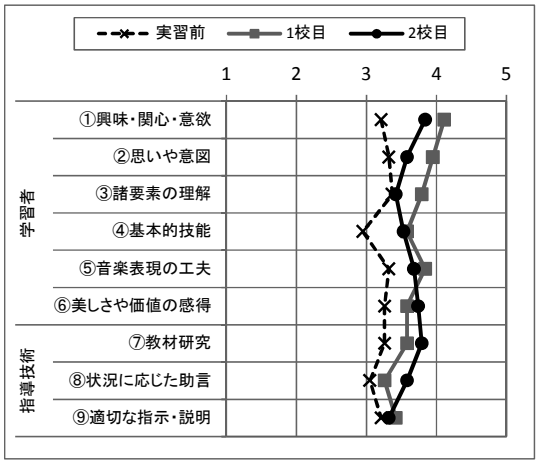

図2-1　音楽科の自己評価結果（歌唱）

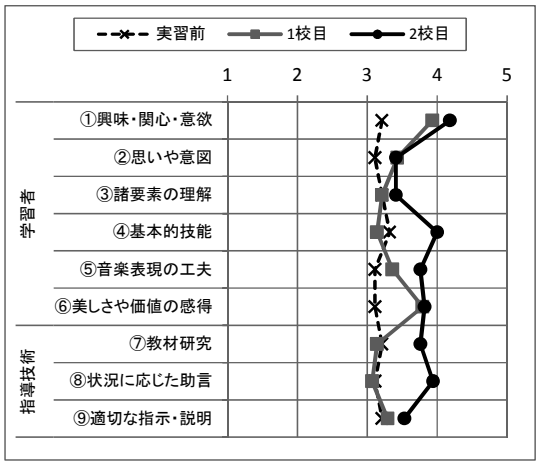

図2-2　音楽科の自己評価結果（器楽）

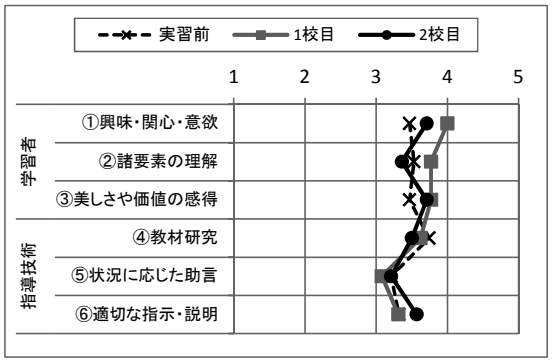

図2-3　音楽科の自己評価結果（鑑賞）

３－３　実習校別の音楽科の教師力について

音楽科に関する自己評価について，実習校別に得点の平均値を比較した。

（１）附属中・高と附属三原中

附属中・高と附属三原中の２校について，歌唱・器楽・鑑賞の領域別に得点の平均値を整理したものが図3-1，図3-2，図3-3である。

歌唱では，附属中・高（図では広島と表記）と附属三原中の両校とも，概ね実習前よりも実習後の方が得点が高い。特に①興味・関心・意欲において得点が大きく上昇している［3.22→4.33（広島）／4.00（三原）］。ただし，附属三原中では③⑥の２項目は実習前とほぼ変化が見られなかった。

器楽でも，概ね実習前よりも実習後の方が得点が高い。歌唱と同様に①興味・関心・意欲の得点が大きく上昇している［3.22→4.00（広島）／4.11（三原）］。附属中・高では②思いや意図の得点が上昇している［3.22→4.00］。附属三原中では⑤音楽表現の工夫が上昇している［3.00→4.22］。

鑑賞では，実習前後で顕著な差は見られない。

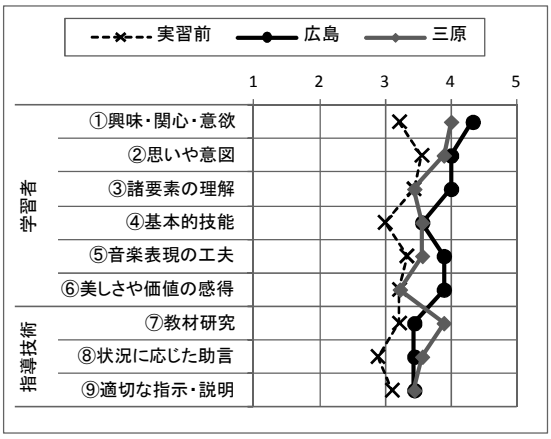

図3-1　音楽科の自己評価結果（広島・三原の歌唱）

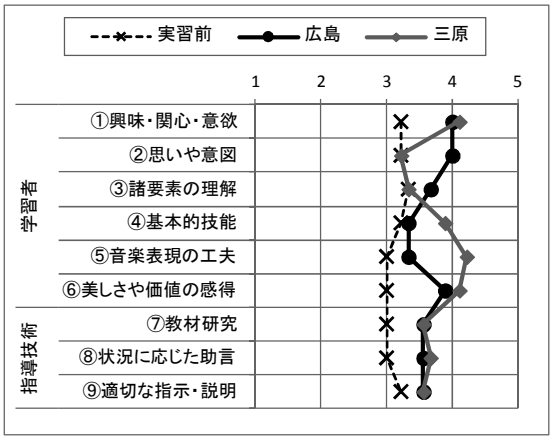

図3-2　音楽科の自己評価結果（広島・三原の器楽）

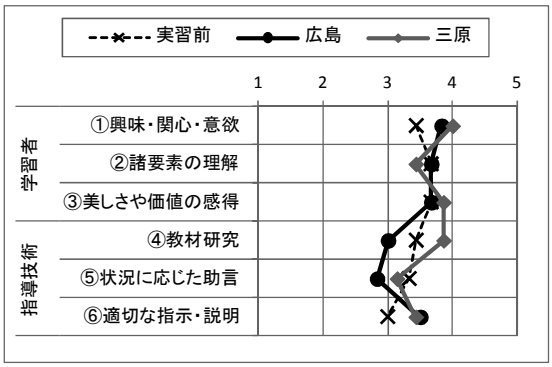

図3-3　音楽科の自己評価結果（広島・三原の鑑賞）

（２）福山中・高と附属東雲中

福山中・高と附属東雲中の２校について，歌唱・器楽・鑑賞の領域別に得点の平均値を整理したものが図4-1，図4-2，図4-3である。

歌唱では，附属東雲中の①④⑤⑦が実習前よりも実習後の方が顕著に得点が高い。福山中・高は「学習者の学習成果」の項目は概ね得点が上昇しているものの，「指導者の指導技術」の項目はほとんど変化が見られない。

器楽では両校とも①興味・関心・意欲の得点が上昇している。その他の項目については，附属東雲中は②を除いて概ね得点が高くなっている。福山中・高は先述した①以外の得点の変化は見られない。

鑑賞では，両校とも大きな得点の変化は見られない。

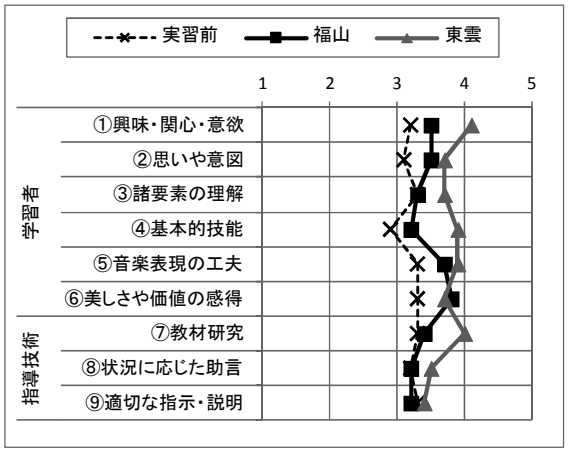

図4-1　音楽科の自己評価結果（福山・東雲の歌唱）

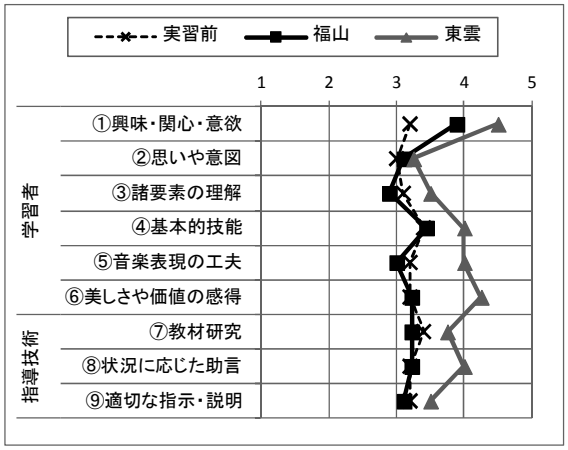

図4-2　音楽科の自己評価結果（福山・東雲の器楽）

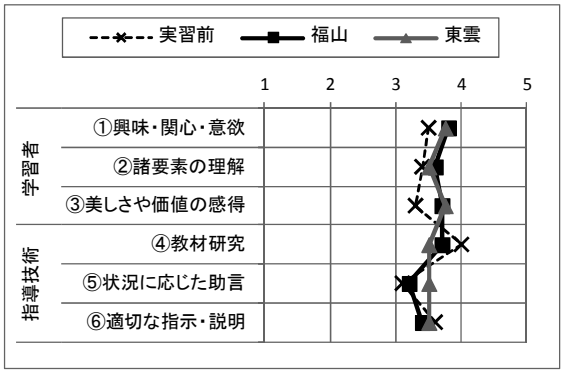

図4-3　音楽科の自己評価結果（福山・東雲の鑑賞）

３－４　指導教員による実習生の観点別評価

①授業の中で生徒指導の三機能が実現する場があったかどうか，②音楽の授業の質は高いものであったかどうか，の２つの観点から，指導教員が実習生の評価を５段階（５点満点）で行った。観点①の平均点は3.68点，観点②の平均点は3.66点であった。

これらを実習校別に整理したものが図５である。附属中・高（広島）と附属三原中がペア，福山中・高と附属東雲中がペアとなり，それぞれ同一の実習生を受け入れている。同じ実習生に対する評価であるが，実習校によって評価に差が生じていることが分かる。各学校には特有の雰囲気があり，生徒の状況や実習の課題も異なっている。また，指導教員の指導観や評価観も異なっている。これらが要因となって学校間の評価点の差を生じさせているのであろう。なお，どの実習校も両観点を同程度に評価している。

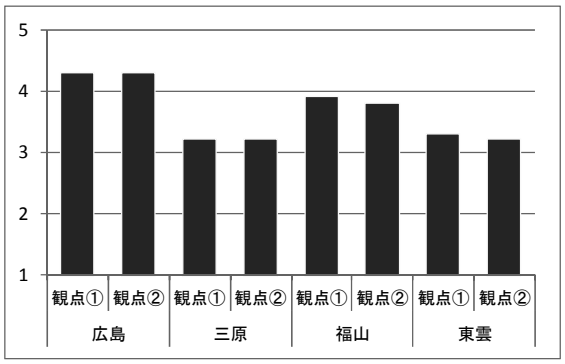

図５　観点別評価の結果

（伊藤　真）

３－５　実習校の指導教員による考察

（１）附属中・高等学校

本校では中学１年～３年まで，歌唱・器楽・鑑賞の各領域のバランスをとり，音楽科教諭２名は日常的に授業内容や展開について連携を密にとっている。歌唱活動は，混声合唱に取り組む際，各パートに生徒リーダーを立て，歌唱を自己評価させながら練習課題を自分達で見つけて練習を展開し，授業者はそれに助言する方法をとっている。授業者が主導で指示し課題を与える方法から，徐々に生徒主体へとシフトしていく。教育実習期間中については実習生の指導技術向上のため，授業者と実習生ＴＴによって積極的に練習を進めてもらい，発問によって生徒リーダーを中心にそれに答えたり，評価をして課題を発見したりというウェイトを高くしている。クラスの生徒実態はそれぞれに異なって

いて（学年によっても差異は大きい），積極的に生徒達で練習を進行できるクラスもあれば，なかなか軌道に乗らない場合もある。実習生は初期の段階で戸惑いや苦労もあるが，２週間の実習期間中に「生徒集団に対応する力」という点において，大きな成長が見られる。

また，本校では中学から高校音楽選択授業に至るまで，器楽指導の場面がとても多いことが特徴である。アルトリコーダー・ギター・管弦打楽器へと使用範囲が拡がり，授業者には幅広い器楽の知識や指導方法の理解が求められる。加えて，生徒の技術水準にも大きな個人差があり，それに応じた指導は高度な技術が必要となる。本校の器楽指導の実習生の振り返りを見ると,そうした事への戸惑いや苦労が見て取れる。実習生の専門領域に近い楽器の指導に対しては比較的高い意欲を持って取り組めているようであるが，自分の専門外の指導には消極的な姿が見られがちで，特に今年度の高校Ⅱ年生の器楽の授業では，生徒の技術水準とは大きく開きのある楽曲(ベートーヴェンのオーケストラ作品)に取り組ませてしまったこともあり，短期指導ではなかなか目に見えた向上が得られなかった。こうした点が，器楽指導の評価が余り高まらなかった要因として上げられよう。反面，実習生個々にそれぞれ良い面・特質が見られ，そうした部分を前面に活用し授業に臨んだ場合は，概して成果の大きい授業が成立していたようであった。

実習生の自己分析結果を受け現場の教員として次につなげたい課題としては，やはり生徒実態に相応しい教材選択をし，実習期間にもそれを生かす，という点である。楽曲を教材化する際に，初心者にも経験者にもある程度達成感を持たせる工夫は大変手間の掛かる作業だが，それが必要不可欠であることを改めて実感するに至った。

また鑑賞の評価が低かったのは，そもそも実習期間内には鑑賞の授業がほぼ行われなかったことが，最大の要因であったと分析している。

（原　寛暁）

（２）附属東雲中学校

本校では教育実習の時期と，校内合唱コンクールの時期が重なっている。中学１年は混声三部合唱，２～３年は原則混声四部合唱で，学級で取り組むにはかなり難易度の高い楽曲に取り組んでいる。しかも，生徒の授業に対する関心意欲はかなり高く，上級生になるほど顕著である。そのため，９月実習はパート練習中心となっている。生徒は，合唱責任者が学級全体の中心となり，パートリーダーがパートの指導をする。実習生は，主として１年生に直接音楽的指導をしていくことが多い。上級生は，自主的に練習をすすめていくため，専門的な助言をする程度となる。これらの状況から，ある程度専門知識・技能を身につけていれば，指導し甲斐があり，努力しただけ達成感も味わえる。

一方で 10 月実習は全体指導が多く,しかも楽曲の難易度が高いため，指揮法も含めた高度な専門知識・技能が必要となる。またスムーズな授業進行も必要となり，実習生にとっては，相当難度の高い授業である。さらには，音楽の授業での成果がコンクール結果に直結するため，生徒の実習生への要求も必然的に高くなる。そのため，時には実習生では途中で授業が出来なくなる場合さえある。

器楽については，和楽器に取り組んだ。１年生に箏の簡単な曲を体験させながら，演奏の基礎から指導する授業内容である。生徒の多くは初めての体験で,楽しく学ぶことが出来やすい。そのため，合唱のパート練習の時と同様，実習生も教えやすく達成感を得やすいと考えられる。

これらの状況から，歌唱・器楽ともに自己評価結果が高いが，歌唱は実習生に高度な専門知識・技能が必要となるため，器楽の方がより顕著に得点が高いという結果につながったと考えられる。

また鑑賞の評価が低かったのは，附属中・高等学校同様，実習期間内には鑑賞の授業がほぼ行われなかったことが，最大の要因であったと分析している。

本校では，このように難易度の高い合唱曲の指導をする時期であることから，実習生には高度な専門知識・技能が必要となる。そのため，実習生に高い向上心がないと実習が成り立たなくことがある。近年，実習生の関心・意欲や専門知識・技能，さらには教職に対する姿勢や社会性など，個人によって大きな差があると実感している。このことも踏まえ，これまで以上に大学と連携して実習をしていく必要性を実感しており，今後の課題と考えている。

（松前良昌）

（３）附属三原中学校

本校では実習生が所属学級の昼食・掃除・学級活動・総合的な学習の時間などに参加し，生徒と人間関係をつくりながら各教科の実習授業を経験していく。幼・小・中の一貫校であることから今年度は小学校の音楽専科教員が中学校７年生，中学校の音楽科教員が小学校３・４・５年生(各学年２クラスのうち１クラス)の授業を行っているため，この２名の教員で実習指導を行った。実習授業の内容は，７年生が鑑賞（魔王，春）／合唱（Let’s search for tomorrow）／ギター，８年生が鑑賞（アイーダ）／合唱（島唄），９年生が鑑賞（世界の諸民族の音楽）／箏（二重奏「さらし」）である。音楽の授業数が限られているため，合唱と器楽についてはＴ１の実習生だけでなく他の実習生も個別指導やパート指導を行うようにした。鑑賞でも実習生全員の楽器演奏やオペラの実演などを取り入れるよう助言したが，鑑賞の授業を経験できなかった実習生もいる。実習生の自己評価について以下に考察する。歌唱・器楽では，「思いや意図」「諸要素の理解」の項目が低い得点だった。これは，題材計画全体の前半を実習生に割り当て教師主導の授業づくりをさせたためであると考える。合唱では楽曲との出会いをよく考えて生徒の意欲を高めること，音を取ること，発声を教えること，表現の仕方を助言することが指導の中心であった。器楽も同様であり，基本的な奏法ができること，曲を弾けるようになることが中心であった。実際，「興味・関心・意欲」「基本的技能」「音楽表現の工夫」が高い得点となっている。導入で生徒の興味や意欲を高め発声や奏法を教え表現の仕方を助言し練習させることはできたが，楽曲の特徴つまり「諸要素」に気づかせながら自らの「思いや意図」をもってどのように表現するかを考えていくような指導はできなかったということであろう。生徒を主体とした授業ができるよう実習生への指導を改善していくことが課題であると言える。また，どの活動領域についても「美しさや価値の感得」「教材研究」の項目は高い得点であった。教材とする楽曲や楽器の素晴らしさを熱心に教材研究し，様々なアプローチで生徒に感じさせ伝えようとしていた実習生の姿が自己評価の結果と繋がる。

（泉谷　正則）（長澤　希）

（４）附属福山中・高等学校

本校では専任の教諭が１名のため，実習生は中学１年生と高校の１～３年生の実習授業を行った。（ただし，非常勤講師が担当する中学２・３年生は授業観察のみを行っている。）

実習の方針としては，歌唱・器楽・鑑賞を関連付けながらなるべく１時間の授業の中で多くのことを行う。そのためには綿密な教材研究と緻密な指導案の作成が必要になるので，特に指導案を作る過程を重視している。

今年度の実習生の特徴は，実習に対する意欲や指導の能力に大きな個人差があったように思われる。授業で扱う内容が多岐にわたるため，早い段階で題材や教材を提示し，実習授業に間に合うような指導を心掛けた。しかし，実際には指導案の完成が遅れて，教材研究や実技の練習，授業の準備等が十分整えられないまま本番に臨み，満足な成果が得られないという実習生も見られた。

自己評価結果の分析であるが，歌唱に関しては実習前に比べて指導技術に関する項目の変化が少ない。これは高校１年生で取り上げた内容が，ドイツ語によるベートーヴェンの歌曲と合唱だったので,指導に苦労したためと思われる。また，器楽では高校２年生でギター弾き語りを行ったため，興味・関心・意欲などのモチベーションは上がったものの，実際に授業をしてみると思うように指導できなかったのが変化の少ない一因と思われる。鑑賞に関しても教材研究が十分でなく，自分　　の言葉で適切な説明をすることに困難を感じていた実習生が多かったためかと思われる。

ただし，今回の自己評価結果や観点別評価の結果はあくまでも平均値であるので，一概に傾向を決めつけられないが，評価が思わしくなかった実習生の底上げを図ることによって，ある程度の質的改善ができるのではないだろうか。そのためには，個々の実習生の長所・短所を見極め，それらを見越した無理のない指導の必要性が感じられた。

一方，9 月実習から 10 月実習に移行するときに,それぞれの実習生がどのような授業を行い，どのような成果をあげ，課題は何なのかという情報を次の実習校の担当教諭に連絡することで，実習生に対する指導方法がより効果的に行えるのではないかと思われる。

（光田　龍太郎）

４．教育実習生から見た，各附属における教育

実習の特徴と課題と解決方法

教育実習終了後の「音楽科教育実践演習２」の授業において，各自の自己評価をもとに，実習グループごとに話し合いを行った。実習中にそれぞれが実感した課題を情報交換し，１）各附属における教育実習の特徴，２）各附属の教育実習における共通の課題，３）課題の解決方法，の３点についてまとめさせた。

【附属中・高等学校】

１）教育実習の特徴
・種類豊富な活動が多く，個性的な授業ができるが，鑑賞は少ない。
・中学生から高校生という幅広い年齢層の授業。
・生徒が主体的に活動できる時間の設定（パート練習等）。
・活動を通した生徒への意識づけ（音楽の意義を探究することを重視）。

２）共通の課題
・合奏において，未経験の楽器の指導がわからない。
・生徒が自主的に動いているパート練習などで，どのように口出ししていいかわからない。
・生徒への評価が難しい。
・活動重視の授業構成であるので，生徒のレベルの差を考慮する必要がある。

３）課題の解決方法
・実習前に，スコア等で大事な部分を確認し，未経験の楽器は専科に指導法を聞く。
・模擬授業の段階で，生徒を相手にすることを意識して考える。
・事前にクラスの雰囲気や現状を把握したうえで，授業構成や評価の仕方を模索する。

【附属東雲中学校】

１）教育実習の特徴
・合唱指導が中心で，朝練や放課後練にも参加。
・生徒のやる気はあるが，差もある。
・生徒との関わりがあり，仲良くなれる。
・教師主導型で，指導案よりも臨機応変さが求められる。

２）共通の課題
・発声法の知識が不足。特に男声への指導がわからない。発声を曲で活かせない。
・伴奏の技術（音取り等）が不足。
・指示が伝わらず，説明が長くなる。
・指揮の技術が不足。
・生徒とのコミュニケーションの必要性（自分から生徒に積極的に関わる，人間関係を分析する）。
・時間の使い方（部分的，全体を通す）が難しい。

３）課題の解決方法
・事前にしっかり勉強し，前もってプランを練る。
・指揮は鏡の前で練習する。伴奏を練習する。
・曲の解釈について先生と打ち合わせしておく。
・歌わせて実感させて，評価する。形成的評価を取り入れ，歌う回数を増やす。
・実習班同士（前期・後期）での情報を共有する。
・実習生同士で課題を共有し，全員で対策を練る。

【附属三原中学校】

１）教育実習の特徴
・生徒指導の三機能を活用した授業構成が必要。
・箏やギターなど，表現領域における多彩な内容。
・小学校との連携活動（異校種交流活動）。
・TT を重視した授業。

２）共通の課題
・三機能を活用する授業構成の難しさ。
・生徒の注意を獲得した上での授業進行の必要性。
・生徒が肯定的感情を維持する，目的意識を持って集中して活動に取り組む環境を整備する必要性。

３）課題の解決方法
・授業を構成する上で，「どの場面で有能感を与えるか」「どのタイミングで受容感を持たせるか」ということを考える必要がある。
・注意獲得など，現場を意識した指導法を考える。

【附属福山中・高等学校】

１）教育実習の特徴
・一時間の中で，歌唱・器楽・鑑賞の全てを行うので，指導案は分刻みで，計画性が重視される。
・生徒との接触が授業以外は禁止。
・伴奏が弾けることが前提とされる。

２）共通の課題
・時間配分（時間が押したときの判断）が難しい。
・実技技能全般の不足。
・教材研究能力や資料選択能力の不足。
・一方的な授業になりがち。説明を端的にできない。
・伴奏のテンポ，音量，歌いだしの合図に課題。
・生徒との関わりがなく，生徒の状況予測が難しい。

３）課題の解決方法
・授業スケジュールの配分を考える。教えたいポイントをいくつかピックアップしておく。
・準備と練習を計画的に綿密にする。指導案を協同して作る。
・他教科の授業を見学して，生徒の状況を把握する。

以上から，各附属学校の教育実習はそれぞれ特徴を有していていることがわかる。附属中・高等学校と附属東雲中学校では，臨機応変な対応力が要求され，附属三原中学校と附属福山中・高等学校では，きちんとした指導案の作成が求められる。すべての附属学校において教育実習生に共通して要求されるのは，音楽の技能と生徒理解力と音楽に対する評価能力である。大学における教科教育の授業での指導案作成と模擬授業の一層の充実や，教科専門の授業での音楽技能のさらなる向上が必要である。また，音楽の技能や音楽に対する評価能力を実際の授業での活用に結び付けられるように，教科教育と教科専門の教員が連携できるような授業開発も必要だろう。

一方，附属学校に要求されるのは，教育実習生の生徒理解力の向上と，臨機応変な対応力の向上に関わる環境設定と指導である。

（三村　真弓）

５．成果と課題

上記項目３－５における附属４校による考察を概観すると，以下のようにまとめられる。

附属中・高（広島）の特徴は，特に器楽や合唱において生徒の自主的学習を重視している点にある。実習生の「生徒集団に対応する力」の成長はみられ，実習生の個性を生かした授業を展開することもできた。「学習者の基本的技能の向上」についての実習生の自己評価は低かった。これは，器楽教材の難度が高かったことが影響していると分析している。課題として，学習者・実習生ともに達成感を得るために，学習者個々の演奏技術に応じた教材開発を行うことが挙げられている。

東雲中の特徴は，教育実習が合唱コンクールに向けての練習時期と重なっており，非常にレベルの高い楽曲に取り組んでいることである。合唱指導においては「学習者の基本的技能の向上」についての実習生の自己評価が低かったことは，附属中高と同じである。教育実習期間に鑑賞の授業がほとんどないことも共通している。実習生の資質や向上心には個人差が感じられ，一層の大学との連携を課題として挙げられている。

三原中の特徴は，教育実習期間における指導計画が，「基本的技能」や「音楽表現の工夫」の指導を中心とした期間にあたっていることである。学習者の「思いや意図」を育むことについての実習生の自己評価が低かったことは，指導計画中の担当箇所が関係していると分析している。課題として，実習生が学習者主体の授業を工夫するよう指導することが挙げられている。

附属福山中・高の特徴は，実習生が歌唱・器楽･鑑賞すべての授業を網羅して体験する点と，よりきめ細かな指導案作成指導を重視している点にある。合唱指導において「学習者の基本的技能の向上」についての実習生の自己評価が低かったことは,附属中高や東雲中と同じである。課題として，実習生の資質や個性に応じた無理のない指導をすることによって，授業の質的改善を図ることができるのではないかということが挙げられている。

本研究２年次の取り組みの成果を，上記項目４の「実習生による実習の振り返り」と併せて総括するならば，大きく次の２点にまとめられる。

１つは，指導教員，実習生ともに同じ①，②の観点で授業評価を行い，さらに実習生の評価も同じ観点で行うことができたことである。項目４における「共通の課題」や「課題の解決方法」の記述内容からも，実習生が①，②の観点を十分に意識したうえで実習に取り組んだことがうかがえる。

もう１つは，各附属教員が各校の特色をふまえながら，実習生の資質向上に向けての課題を明らかにすることができたことである。

今後，大学とのより緊密な連携を引き続きとっていくことは言うまでもないが，９月実習から 10 月実習への引き継ぎの際に,各実習生の特性や課題について「指導教員の所見」を簡潔な形でもよいので記述し，ペアの実習校同士で連携することを考えている。

（増井知世子）

６．終わりに

今回の研究にあたっては，４つの附属学校が各学校の状況（生徒の実態や学校行事）など事情が異なるにもかかわらず，実習生の資質向上に向けて大学と各実習校とが連携をとることができた。これこそが大きな成果である。またそこから，大学と附属学校に求められる指導について，それぞれ明らかとなった。大学で培われた音楽の技能や音楽に対する評価能力を，附属学校で生徒理解力の向上や臨機応変な対応力の向上に，いかに関連させて考えることができるのか，その実習生の応用力の向上がさらに求められる。

（枝川　一也）

引用（参考）文献

１）中央審議会（2006)「今後の教員養成・免許制度のあり方について（答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm
（2015.1.25　取得）